

— 80年前に生まれた「世界一強い女の子」—

〈長くつ下のピッピ〉が 今いたならば……



作品集

©The Astrid Lindgren Company/
Ingrid Vang Nyman

Pippi
Longstocking



津田塾大学
TSUDA UNIVERSITY

Index



作/A.リンドグレン
文/角野栄子
絵/あだちなみ
(ポプラ社刊)



作/アストリッド・リンドグレン
絵/イングリッド・ヴァン・ニイマン
訳/菱木晃子
(岩波書店)



作/アストリッド・リンドグレン
訳/大塚勇三
(岩波少年文庫)

課題文	2
入賞作品	3
講評	4
最優秀賞作品	5
優秀賞作品	6
募集要項	9
応募者在学校一覧	10

『長くつ下のピッピ』は、今から80年前の1945年にスウェーデンで出版された児童文学作品です。英語、日本語など約80の言語に翻訳されています。みなさんの中には、この作品をワクワクしながら読んだ人もいることでしょう。

ピッピは9歳の女の子。両親はおらず、サルや馬と一緒に楽しく、元気に暮らしています。怪力の持ち主で、大人が眉をひそめるような言動も多いのですが、ピッピは「こうあるべき」といった常識にとらわれず、空想力豊かに、とことん自由に生きています。「天衣無縫」という言葉がぴったりなのです。

作者は、アストリッド・リンドグレン(1907-2002)。子どもに愛される作品を数多く書き残しただけでなく、子どもへの暴力禁止や動物保護のために声をあげ、平和を求めるオピニオン・リーダーとしても活躍しました。

リンドグレンの公式ホームページでは、ピッピを次のように紹介しています。

"She is a symbol of freedom, strength, kindness, courage and justice. A rebel who uses her superpowers wisely and never abuses her power. She stands up against what is wrong."

世界では、今も争いや分断が絶えません。子どもに対する虐待や教育格差なども問題となっています。みなさんの日常でも「あなたは女の子(男の子)だから」「高校生らしく」など、枠にはめられる場面はありませんか。もしも、「ピッピ」がそばにいたならば、あるいは自分がピッピのように行動できたなら、世の中が少しだけ変わるかもしれませんね。

次の英文やピッピについての文献や映画なども参考にして「<長くつしたのピッピ>が今いたならば……」をテーマにエッセーを書いてください。

*<https://www.astridlindgren.com/gb>



©The Astrid Lindgren Company/
Ingrid Vang Nyman

—80年前に生まれた「世界一強い女の子」—

〈長くつ下のピッピ〉が 今いたならば……

ニンジン色の髪を左右にきつく編んだ、そばかすだらけの顔のピッピ。着ているワンピースはお手製の風変わりなもので、肩にサルの子のHerr Nilsson (ニルソン氏) を乗せて歩きます。

.....On her long thin legs she wore long stockings, one brown and the other black. And she had a pair of black shoes which were just twice as long as her feet. Her father had bought them in South America so she would have something to grow into, and Pippi never wanted any others.

The thing that made Tommy and Annika open their eyes widest was the monkey which sat on the strange girl's shoulder. It was little and long-tailed, and dressed in blue trousers, yellow jacket, and a white straw hat.

Pippi went on down the street, walking with one foot on the pavement and the other in the gutter. Tommy and Annika watched her until she was out of sight. In a moment she returned, walking backwards. This was so she shouldn't have to take the trouble to turn round when she went home. When she came level with Tommy and Annika's gate, she stopped. The children looked at each other in silence. At last Tommy said, "Why are you walking backwards?"

"Why am I walking backwards?" said Pippi. "This is a free country, isn't it? Can't I walk as I please!"
(英文は講談社英語文庫、アストリッド・リンドグレン・著/和地あつを・絵
『長くつ下のピッピ Pippi Longstocking』講談社インターナショナル、1999年より引用、pp.12-14)

ピッピは、自分を施設に入れようとするおまわりさんと鬼ごっこをしたり、泥棒とボルカを踊ったりします。学校では「7たす5はいくつになるかしら?」と尋ねる先生に、こう言います。

"Well, if *you* don't know, don't think I'm going to work it out for you!"
(同書、p.49より)

サーカスでは世界一の力もち、と宣伝されている男の人に勝負を挑みます。
"But you could *never* do it," said Annika. "Why, that's the strongest man in the world!"
"Man, yes," said Pippi, "But I'm the strongest *girl* in the world, don't forget."
(同書、p.99より)

ピッピはおもしろい遊びを次々と考え、決して退屈しません。「おかしい」と思うことには口をつぐまず、人々の偏見や思い込みに対しては別の見方があることを、荒唐無稽と思えるようなお話から示唆するのです。

ピッピや著者リンドグレンに関しては、様々な書籍や記事、作品が出ています。ぜひいろいろ調べてみてください。



作/A.リンドグレン
文/角野栄子
絵/あだちなみ
(ポプラ社刊)



作/アストリッド・
リンドグレン
絵/イングリッド・
ヴァン・ニイマン
訳/姜木見子
(岩波書店)



作/アストリッド・
リンドグレン
訳/大塚勇三
(岩波少年文庫)

入賞作品

応募作品：129編（内訳：英語作品78編、日本語作品51編）
選考の結果、次の方たちが最優秀賞・優秀賞に選ばれました。（アルファベット順）

最優秀賞

（1名）

成蹊高等学校 1年生（東京都）

峰 凜々花 さん

（日本語）

優秀賞

（3名）

膳所高等学校 3年生（滋賀県）

林 樟太郎 さん

（日本語）

法政大学高等学校 2年生（東京都）

金生ベカ 美愛 さん

（英語）

Clear Lake High School 3年生（Texas）

加藤 里桜 さん

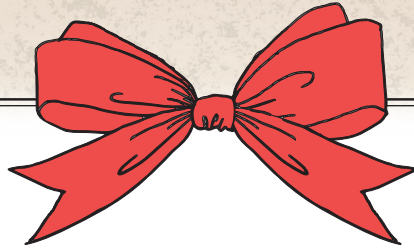
（英語）

第25回 高校生エッセー・コンテスト審査委員

委員長／木村 朗子 津田塾大学ライティングセンター長 多文化・国際協力学科教授

委員／大島 美穂 津田塾大学 総合政策学科教授

委員／大原 悦子 津田塾大学ライティングセンター客員教授



講 評

2025年はアストリッド・リンドグレン『長くつ下のピッピ』の生誕80年である。ピッピは、戦後の時間を共に歩んできたことになる。大きく世相が変わったいま本作はどのように読まれているのだろうか。「<長くつ下のピッピ>が今いたならば……」と想像を膨らませたエッセイが集まった。

最優秀賞は峰凛々花さん。峰さんは早々に学校システムから離脱したピッピについて、では学校に行くというのはどのようなことかと問う。いまでいえばピッピは「不登校」児ということになるわけだが、ではピッピはダメな子なのか。峰さんは「私もピッピだった。子どもは皆ピッピだ」といい、ピッピのなかに同調圧力に屈せず、「NO」と言える強さを見出す。それこそがピッピがいつの時代にも古びないメッセージなのでしょう。

優秀賞には選ばれたのは、順不同で、日本語エッセイとして林樟太朗さん、英語エッセイには加藤里桜さん、金生ベカ美愛さん。

林樟太朗さんは、まさに「ピッピのよう」な子だったという。北欧由来の教育をする「森のようちえん」でのびのびと育った林さんは、後年、北欧を旅してピッピの生まれた国にも訪れている。こうした根っからのピッピ精神を受け継いだ林さんは日常の違和感を見逃すことなく未来をつくっていくのだ、と結んでいる。

加藤里桜さんは、アメリカの学校でシャケときゅうりの酢の物の入ったお弁当に嫌悪を示された経験を語る。もしそこにピッピがいたならきっと好奇心で目を輝かせたはずだ。加藤さんにとってピッピとは自分とは異なる文化的背景を持つ人のそばに座って、それを知ろうとして分かち合おうとする人のことだという。

金生ベカ美愛さんは、ルールに従うように仕向けられた学校社会で、既存の制度に立ち向かうピッピについて、それはファンタジーなどではない、一種のモデルとなるべき姿なのだと述べる。少々不器用で、それゆえに人間的なピッピのような人こそ、いま求められているのだ、と。

自らがピッピとなって世の中を変えるのだという高校生の手強い決意を読んで明るい未来を感じることができた。

2025年度高校生エッセイ・コンテスト審査委員長・ライティングセンター長

学芸学部多文化・国際協力学科教授 木村 朗子

最優秀賞

Pippi
Langstocking

成蹊高等学校 1年生
(東京都)

峰 凜々花さん

虚ろな目をして憔悴しきったピippiが、家から出ずに泣いているのが見える。社会や大人たちはピippiの行動に粘り強くダメ出しし、彼らが「正しい」と信じる型にはめるべく矯正し続けた。今やあのピippiが、「気を付け! 礼! 前へ倣え!」という敬礼までできるようになり、周囲は「まともになった」「やっと成長した」と喜んだ。でもピippiはもはや、かつてのピippiではなかった……。

私もピippiだった。子どもは皆ピippiだ。自由で楽しくて、ビビビバババで大笑いできる逆立ち歩きのピippi。けれど「ダメの壁」は至る所にあり、「普通」という枠からはみ出た「魂の棘」や「夢見る翼」、「無邪気な悪」といった個性の芽は削ぎ落とされ、画一的な「優等生」へと変えられてしまう。学校という箱に入れば、皆、同じ形の「人型ロボット」へと仕立てられてしまう。

そんな生きづらさを感じるのは私だけじゃなく、クラスメートも、ひとり、またひとりと姿を消していった。彼らがいなくても、まるで最初から存在しなかったかのように、日常は進んでいく。空席の机に積もるプリントを、先生が「もう配らなくていい」と言ったとき、私は言葉を失った。何もできない自分が、彼らを置いてけぼりにする大人たちの「共犯者」になったのだと、その無力感に打ちのめされていた。せめて、「学校に来なくても、あなたはずっとクラスメートだよ」と伝えられたらよかったのに。ニュースで「引きこもり」の話題に触れるたび、彼らが憔悴した「現代のピippi」に思え、苦しくなる。彼らはきっと、「家に留まる」という選択で自分を守り、個性を失わないための最後の抵抗をしているのだ。

ピippiが「学校にはもう行かない」と決めたように、学びの場は学校だけじゃない。しかし、「不登校」という言葉は、非があるかのように突き放すだけで、他の選択肢を尊重しようとはせず、希望の道も示さない。誰かが決めた「正常」から外れた人間は、その診断書を抛り所のように握りしめ、「正しくない」理由はその病名にあると言い聞かせる。だが、そもそも「正常」とは何なのか? 誰が何の基準で決め、その価値を測るのか? 「本人の幸せ」は一体どこに?

私と彼らとの違いは、「自分」を守ったか、「普通」のために差し出したか……なのかもしれない。本当は私だって、ピippiに負けないうくらいハチャメチャだったのに! 同調圧力に屈せず、「NO」と言える強さを持ち、自分のためだけでなく、他者のために戦う「世界一強い女の子」は私たちだ、といえる自分でありたい。「常識になんか囚われるな! 自分の道を行け! つまらない人間になるな!」——ピippiの声が耳元で響く。そして、木の上にひょいと登り、私たちを見下ろしながら、こう続けるのだ。

「さあ、グズグズしてるのはおしまいよ! 自分の好きなように生きなきゃ。じゃなきゃ、人生なんて退屈すぎて、あくびが出ちゃうわ! ほら、こっちへおいで。だって、あなたが生きてるだけで、世界はもっと面白くなるんだから!」

優秀賞

Pippi
Langstocking

膳所高等学校 3年生
(滋賀県)

林 樟太郎 さん

私は幼少期から、納得しないと行動できない子どもだった。大縄跳びの順番を待てず、同じ時間にみんなでお昼寝なんてもってのほか。両親はよく「あんたピippiみたいな子やな」と言った。公立の子ども園が私に合わないと感じた両親は、新たな居場所として、一日中森の中で保育を行う「森のようちえん」を見つけ、通わせてくれた。今日は何をする？ お昼はいつ食べる？ そんな全ての決めごとは、丸太に座って納得するまで子ども達で話し合っただけだった。自由の相互承認と民主主義とが担保された「森のようちえん」の空間は、私にぴったりだった。

中学に進学した際、「中学生らしさ」を過度に求める校則と、それをめぐる生徒と先生の口論に疑問を持つようになった。「森のようちえん」では誰もが納得するまでルールを話し合ったからだ。対立ではなく、対話によって学校をより良くする方法はないだろうか。生徒会長として「対話的な校則見直し」の活動を進め、最終的に多くの校則を、全校生徒と先生方との対話と納得によって変えることができた。また、気候変動対策への危機感から署名を集め請願書を提出し、滋賀県議会で条例を変えた経験もある。「納得しないと行動しない」ことを、「納得のために行動する」ことに昇華できた経験だ。

「森のようちえん」が発祥した北欧の教育と社会を自分の目で見て、その本質を探究したい。そんな思いから、高校2年の冬に政府の奨学金を利用し、北欧3国へ3週間ほど渡航した。約20機関ほどを独自に訪問する中、デンマークの田舎にある森のようちえんを研究フィールドとして訪れた。子どもたちと森へ入った時、夜の長い冬の北欧の薄い光が、何かに眩しく反射した。子どものリュックに揺れる「ピippi」の小さなキーホルダーだった。思わず写真を撮らせてもらい、すぐに両親に送った。「いた。ここにもピippi!」。時代も国も違う森の中、あの日の自分のように、ピippiを心の片隅に、走り回る子どもがいることを、とても嬉しく感じた。

私にとってピippiとは、「自分の考えを持ち、それを行動にする優しさと勇気」の象徴だから。今ではボロボロの絵本に、これまで何度も支えられた。理不尽と偏見がいまだに横行する世界。ウクライナやパレスチナでの対立、教育格差や差別と排外主義といった現状を乗り越えるには、間違いなくピippiが象徴するような「優しさと勇気」が必要だ。

長くつ下のピippiが今いたならば……。理不尽や偏見には一緒にNOを突きつけ、理想の自由で平等な社会のため共に対話してくれるだろう。しかし、現実の仕事は私たちの手にある。大きすぎる世界の問題の本質は、ピippiの物語のように、私が起こした幾つかの行動のように、日常の端々に潜んでいる。だから、小さな日々の違和感を見逃すことなく、対立ではなく対話によって解決していく姿勢がとても大切だ。

ピippiがたった一人、船からスウェーデンに降りたように、列車でデンマーク・スウェーデンの国境を抜け、私も決意を新たにしたい。優しさと勇気を胸に、未来をつくる一人でありたい。



"If you are very strong, you must also be very kind."

For eighty years, Pippi Longstocking has been standing on desks while the world tells her to sit. Today, we face the same choice: conform to systems that limit human potential, or stand up and remake them with courage, creativity, and boundless joy.

We live in a world where children are taught to follow rules that serve no one, creativity is sacrificed for compliance, inequality is disguised as "the way things are," fear masquerades as wisdom, and adults have forgotten the revolutionary power of play. Pippi rejects this world.

Her creed is audacious kindness. Strength without kindness is empty; kindness without courage is powerless. True change happens when Pippi's superhuman strength meets her infinite capacity for love. She acts fearlessly when she sees injustice, turns scavenger hunts into environmental missions, and proves that joy and rebellion can coexist. True freedom, for her, means everyone - regardless of background - can be extraordinary.

In classrooms, she challenges rules that crush spirits. In communities, she organizes with the playfulness of children and the determination of revolutionaries. At every gathering, she turns ordinary moments into launching pads for extraordinary change. Every time she stands up to a bully, questions a system, includes someone ignored, creates beauty, or chooses hope over cynicism, she sends ripples through the world that grow into waves of transformation.

Pippi's example shows that strength is not just physical. It is the courage to act, the generosity to support others, and the wisdom to confront injustice. Imagine a world where every child knows their own moral, creative, and intellectual strength; where diversity is celebrated; where problems are met with inventive solutions and optimism; where justice and joy walk hand in hand.

This isn't fantasy - it's a blueprint. The world needs more Pippis, not perfect heroes, but perfectly imperfect humans who see possibility where others see problems. Stand on the desk. Question the rule. Protect the vulnerable. Create the impossible. The revolution isn't coming - it's here, in children at play, building a better world one audacious act of kindness at a time.

Because if Pippi were here today, she wouldn't just change the world. She would teach us all that we had the power to change it ourselves all along.



The lid of my bento box slid open. A wisp of salmon and vinegar-soaked cucumbers rose in the air.

The rice had little umeboshi flowers tucked in, their pink bleeding slightly into the grains. My grandmother must've woken before dawn to pack this.

"What are you eating girl? This smells like raw fish." The girl next to me wrinkled her nose. I could hear the quiet giggles of my classmates around her.

I laughed too, but my chopsticks trembled slightly in my hand. What hurt more than the words was what they dismissed. The meal wasn't just lunch; it was a piece of my culture, and a symbol of my grandparents' pride. They run a small seafood restaurant nestled in one of the most historic quarters of Kurashiki, Japan. Fish is not a smell to be ashamed of in my family. It is the smell of love, tradition, of early morning sashimi preparation and the quiet dedication to craft.

But in that American classroom, surrounded by PB&J sandwiches and juice boxes, my lunch felt foreign. I felt foreign.

If Pippi Longstocking had been there, maybe she'd have plopped down next to me, swinging her mismatched socks. She'd peek into my box, eyes wide.

"Whoa, fish for lunch? Cool!", she'd say, and snatch a piece without asking. "You guys don't know what you're missing." She might pull out her own lunch box, putting out something even more unexpected: rainbow-colored jellybeans, or green-colored curry. The kids around us would begin to ask questions, and maybe even take a bite out of our lunch.

Pippi Longstocking doesn't flinch when the world stares. She makes the world stare back – with curiosity.

In a world that moves toward connection, misunderstandings from differences in culture or background are bound to happen. In those moments, do we shrink into silence, or do we lean in with wonder?

I think of Pippi when I hear whispers or see the quick glances people exchange. And slowly, I've learned not to laugh along. It is crucial that we speak up: not just for ourselves, but the pride and love packed in food, names, and traditions.

We all need a bit of Pippi's boldness now. To sit beside someone whose lunch smells "weird" and ask, "What's in it?" To taste. To listen. To remind the room. After all, there is no right way to eat, live, or be.

—80年前に生まれた「世界一強い女の子」—

〈長くつ下のピッピ〉が 今いたならば……



作/A.リンドグレン
文/角野栄子
絵/あだちなみ
(ポプラ社刊)



作/アストリッド・リンドグレン
絵/イングリッド・ヴァン・ニイマン
訳/菱木晃子
(岩波書店)



©The Astrid Lindgren Company/
Ingrid Vang Nyman



作/アストリッド・リンドグレン
訳/大塚勇三
(岩波少年文庫)

募集要項

【募集内容】

裏面の英文やピッピについての文献や映画なども参考にして「〈長くつ下のピッピ〉が今いたならば……」をテーマにエッセーを書いてください。英語の場合は400words程度、日本語の場合は1000～1200字程度。エッセーにはテーマとは別に独自のタイトルもつけてください。

【応募資格】

高校生(国籍・学年・性別・居住地は問いません)

【応募方法】

所定のGoogleフォームにエッセーを記載して応募(郵送・持ち込みは不可)。

Googleフォーム

<https://forms.gle/7mrV6vK72Mnt6WUs5>

※Googleフォームは下書き保存ができません。Wordファイル等に下書きを作成してから所定のGoogleフォームにコピー・アンド・ペーストしてください。



【応募期間】

2025年8月1日(金)～9月2日(火) 12:00受付締め切り

【表彰】

最優秀賞1名(賞状及び副賞5万円を贈呈)

優秀賞若干名(賞状及び副賞1万円を贈呈)

受賞者は、9月中に津田塾大学Webサイトで公表します。最優秀作品は津田塾大学において表彰し、津田塾大学広報誌『Tsuda Today』と津田塾大学Webサイトに、優秀作品は津田塾大学Webサイトに掲載・公表します。なお、応募作品の著作権はすべて津田塾大学に帰属します。

【問い合わせ】

津田塾大学ライティングセンター 高校生エッセー・コンテスト事務局

(TEL: 042-342-5142)

E-mail: essaycon@tsuda.ac.jp

<https://www.tsuda.ac.jp/aboutus/essay/index.html>

応募者在学高校（2025年度）

都道府県	公私	学 校 名
北 海 道	公 立	札幌開成中等教育学校
	私 立	道愛女子高等学校
	私 立	帯広大谷高等学校
栃 木 県	私 立	文星芸術大学附属高等学校
埼 玉 県	公 立	大宮光陵高等学校
	公 立	大宮国際中等教育学校
	私 立	淑徳与野高等学校
千 葉 県	私 立	国府台女子学院高等部
	私 立	渋谷教育学園幕張高等学校
東 京 都	国 立	お茶の水女子大学附属高等学校
	国 立	筑波大学附属高等学校
	国 立	東京学芸大学附属国際中等教育学校
	公 立	上野高等学校
	公 立	第一商業高等学校
	私 立	郁文館グローバル高等学校
	私 立	大妻中野高等学校
	私 立	関東国際高等学校
	私 立	学習院女子高等科
	私 立	晃華学園高等学校
	私 立	国際基督教大学高等学校
	私 立	サレジオン国際学園世田谷高等学校
	私 立	渋谷教育学園渋谷高等学校
	私 立	頌栄女子学院高等学校
	私 立	白百合学園高等学校
	私 立	女子学院高等学校
	私 立	成蹊高等学校
	私 立	東京電機大学高等学校
	私 立	東洋英和女学院高等部
	私 立	広尾学園高等学校
	私 立	法政大学高等学校
	私 立	The American School in Japan

都道府県	公私	学 校 名
神 奈 川 県	公 立	生田高等学校
	公 立	横浜国際高等学校
	私 立	栄光学園高等学校
	私 立	関東学院高等学校
	私 立	湘南白百合学園高等学校
	私 立	
長 野 県	公 立	須坂高等学校
静 岡 県	私 立	静岡雙葉高等学校
愛 知 県	私 立	東邦高等学校
滋 賀 県	公 立	膳所高等学校
大 阪 府	私 立	大阪学芸高等学校
	私 立	関西創価高等学校
	私 立	早稲田大阪高等学校
兵 庫 県	国 立	神戸大学附属中等教育学校
	私 立	姫路女学院高等学校
	私 立	マリスト国際学校
岡 山 県	私 立	岡山学芸館高等学校
	私 立	清心女子高等学校
香 川 県	公 立	高松北高等学校
アメリカ	公 立	Clear Lake High School



株式会社栄美通信は、広告代理業として各事業（進学情報事業・企業広報事業・教育広報イベント事業・企業広報イベント事業・進学情報誌出版事業等）の個人情報適正に取り扱い、個人情報の保護を徹底することが社会的責務であると認識し、「個人情報保護方針」を制定してお客様に安心して弊社のサービスをご利用いただけるよう、全従業員がこの方針に従って個人情報保護に対する取組みを実施しております。個人情報についてのお問い合わせは【お客様相談窓口】TEL 03-3561-0471（平日10:00～17:00（12:00～13:00と土日祝日を除く））



津田塾大学
TSUDA UNIVERSITY

<https://www.tsuda.ac.jp/>